number 13

発掘 文学の宝

本年最後の「文学の宝」コラムは、先月に引き続き、九州大学天草臨海実験所の初代所長、大島廣さんです。昭和天皇との関わりやその後の経歴などが分かる内容となっています。

企画／ドットワークス　下川嘉奈

大島（おおしま）　廣（ひろし）

1885年11月5日-1971年3月6日、大分県大分市出身

第五高等学校教授、九州帝国大学教授（一時東京帝大兼任）、天草臨海実験所長を経て退官後近江兄弟社学園講師を務めた。帝国学士院会員、動物分類学会会長

生誕140年

九州大学天草臨海実験所の初代所長の功績と生涯

宮崎　國忠

大島は初代実験所長となり開設の昭和3年から退官の昭和21年まで12年間、この地において「ウニやなまこ」珊瑚礁はじめ富岡の海を対象に研究を続けることになる。

昭和6年には、熊本で行われた陸軍の大演習に昭和天皇が臨まれる機会があった。昭和天皇は生物学を熱心にご研究されていたことに伴い、大正14年に赤坂離宮に研究室を、ご即位後、昭和3年には皇居に生物学研究所を設けられ、時期と軌を一にして開設された天草の実験所には、御用掛の学者とともに関心を寄せられお訪ねになりたい希望もあったといわれるが、遠路のため叶うことはなかった。代わりに、天草の海と生物について大島所長を召して御進講の機会を設けられた。その際大島は、天草の海産生物を献上した。

昭和45年に天皇の2冊目の研究書として発刊された『天草諸島のヒドロゾア』の出版にはその時の献上品にそのきっかけがあったといわれる。前述（広報れいほく11月号）の昭和24年の実験所ご訪問には、この事情が大きく作用したと思われる。

こうした事情については、後に大島が刊行する『研究室の裏窓』という著作に詳しい。その後、定年で退官することになると、天草の海での静かな研究を望み、未練を残しながらも家庭の事情などで琵琶湖の畔に居を移す。建築家ヴォーリスが設けた教育施設の近江兄弟社の強い招きに応じたもので、そこで子弟教育に励み人柄を誰からも慕われ信頼されて、18年間にわたり任務を尽くす。私が大島の消息をたどって近江兄弟社をお尋ねしたとき、驚いたことは、記念館に展示されている資料の中に真っ先に子どもたちを指導している大島所長の大きな写真が目に留まったことである。また、そこにおられたヴォーリス記念館の職員・教え子の方々がその人柄をほめ称えておられたのが印象に残った。退職後は京都・盛岡を経て、東京に転住し生涯を終える。

著書には人柄を反映したものが目を引く。自分の研究対象である『ウニなまこ生きもの百態』。かつての恩師や同僚・仲間であった人、研究を継承発展した仲間であった生物学会の人物像を描いた『一動物学徒の記録』など。なかなか入手しにくいかもしれないが、富岡の実験所を訪ねれば見ることができる。

実験所は、その後も、優れた研究者が代々の所長として赴任し優れた研究成果を上げてきた。苓北町と実験所との海洋に関わる自然環境との連携といった面で、実験所の功績がこれからも多くの方々に認知され、評価され続けることに期待をしているところである。

実験所は平成10年に新しい調査実習船「セリオラ」が建造されるまで、調査船の名前を「大島丸」としてその功績を長くたたえたのである。

お勧め本

『研究室の裏窓』

大島廣著／内田老鶴圃

大島さんの著書の中で、自叙伝ともいえる天草での研究生活や天皇陛下との関わりが記された、苓北町の人々に一番読んでいただきたい一冊。